

ともしび双書

神奈川県福祉作文コンクール 入選作品集



平成 29 年度版

ま え が き

福祉作文コンクールは、昭和52年から始まり、今年で41回目を迎えました。コンクールを通じて、次世代を担う子どもたちに「たすけあい」や「思いやり」の心を育み、誰もがお互いを支え合う「ともに生きる福祉社会」が実現するように願い、行われてきました。

今年、県内の小・中学校合わせて275校から9,621編の応募がありました。小・中学生別に、県内市区町村ごとの地区審査会および県最終審査会を経て、最優秀賞16編、優秀賞20編、準優秀賞20編の入選作が決定いたしました。

本作品集は、入選された56編の作品の中から最優秀賞16編を掲載しました。どの作文も、自分の体験や経験を通じて感じたこと、考えたことなどが自身の言葉で丁寧に書かれています。この作品集が県民皆さまの目に留まり、相手を思いやり、たすけあい、支えようとする優しい気持ちで社会全体へ広がっていくことを願っています。

本来ならば、すべての入選作品をご紹介したいところですが、誌面の関係で、優秀賞及び

準優秀賞の作品は、題名・学校名・氏名を掲載させていただきました。

なお、最優秀賞を受賞された作品は、児童、生徒の気持ちを尊重し、原則として原文どおりに掲載しています。

結びにあたり、コンクールに参加した小・中学生の皆さん、指導にあられた先生方、ご家族の皆さま、ご多忙のなか審査をお願いしました委員の方々に、心よりお礼申しあげます。

また、ご協力いただいた神奈川県、神奈川県教育委員会、各市町村教育委員会、日本放送協会横浜放送局、(株)テレビ神奈川、(株)神奈川新聞社、(公財)日揮社会福祉財団の皆さまに深く感謝申しあげます。

平成29年12月

社会福祉法人神奈川県共同募金会
社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会

審査にあたられた方々

日本放送協会横浜放送局
 放送部部長
 株式会社テレビ神奈川
 営業本部 営業推進室長兼事業推進部長
 株式会社神奈川新聞社
 クロスメディア営業局 出版メディア部 部長
 公益財団法人日揮社会福祉財団
 常務理事兼事務局長
 神奈川県保健福祉局福祉部
 地域福祉課 課長
 神奈川県立総合教育センター
 教育課題研究課 研究開発班 指導主事
 社会福祉法人神奈川県共同募金会
 常務理事
 社会福祉法人神奈川県社会福祉協議会
 常務理事

北川 薫
 遊馬 秀樹
 鈴木 木毅
 木高 正志
 笹島 大志
 田中 恵美
 八木 明
 石黒 敬史

(順不同/敬称略)

第41回神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 目次

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

仲間がいるからがんばれる

伊勢原市立竹園小学校

六年 松田 一真…………… 1

神奈川県教育長賞

知ること

開成町立開成小学校

五年 大野朱々風…………… 3

日本放送協会横浜放送局長賞

ひいおばあちゃんはわすれんぼう

寒川町立一之宮小学校

二年 小島 由楽…………… 5

テレビ神奈川社長賞

その人になっただらどうか？ つかんがえることがたいせつだよ

カリタス小学校(川崎市・多摩区)

一年 秦 望結…………… 7

神奈川新聞社長賞

ろうじんホームでえがおがいっぱい

小田原市立新玉小学校

一年 岩田

知優……………9

ふれあい賞

マンシヨンは大家族

横須賀市立田戸小学校

五年 横田

一平……………11

神奈川県共同募金会長賞

地域交流について思うこと

藤沢市立六会小学校

六年 萩原

凜……………13

神奈川県社会福祉協議会長賞

バリアフリーって何だろう

開成町立開成南小学校

六年 井上

温……………15

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

おっちゃんと私

逗子市立久木中学校

二年 木戸 沙奈……………17

神奈川県教育長賞

小さな勇氣

平塚市立神明中学校

三年 春日日菜子……………20

日本放送協会横浜放送局長賞

もやははらえば

三浦市立三崎中学校

三年 木村 愛美……………23

テレビ神奈川社長賞

笑顔をつくる介護

寒川町立旭が丘中学校

三年 加藤 紫乃……………26

神奈川新聞社長賞

私と弟

平塚市立中学校

二年 小林 愛海……………29

ふれあい賞

その一言で

伊勢原市立伊勢原中学校

二年

長谷川朋世……………32

神奈川県共同募金会長賞

自分のできることから始めよう

大井町立湘光中学校

一年

平野

礼……………35

神奈川県社会福祉協議会長賞

偉大なる祖母から学んだ事

伊勢原市立成瀬中学校

三年

葛貫

日菜……………39

優秀賞・準優秀賞入選者名簿……………

43

小学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

仲間がいるからがんばれる

伊勢原市立竹園小学校

六年 松田一真

ぼくには、両耳の難聴という病気があります。それで、今までとてもいやなことが人の倍くらいあると感じていました。補聴器を着けていると、周りのみんななよりも位が低くて劣っているように感じます。だから学校でも、友達の前でも悲しさを見せないように無理して明るくしていました。本当は、だれかにその気持ちを分かってほしかったです。

五年生の時に学年でキャンプに行きました。仲良しの友達と同じグループになって、泊まりました。その日の夜、グループの仲良し三人で、寝る前に色々な話をしました。その時に初めて友達に

「でも、ぼくは人とは少しちがって、補聴器もしているし、やっぱり何でも無理じゃないかって思うんだ。」

と、自分の気持ちを言ってみました。そうしたら、ぼくの友達の雅斗くんが、

「そんなことはないよ。ぼくは、一真が補聴器をしているのは、全然気にしてない。補聴器をしていることを気にしたこともないよ。だから気にするなよ。」

と言ってくれて、もう一人の友達の隼人くんが、

「そうだ。気にするな。」

と、かたをポンポンとたたいて言ってくれました。そして、『足が速い』、『ドッジボールが得意』など、ぼくの長所を二人でいっぱい言ってくれました。ぼくは、涙が出そうになりました。

「そうだ。人と比べなくても自分は自分でいいんだ。」

と、雅斗くんと隼人くんのおかげで、思えることができました。今までのなやみがスッキリしました。これからまた、いやなことがあったとしても、雅斗くんと隼人くんの言ったことを思い出してがんばれると思いました。

ぼくは、優しくて心強い友達がいてくれて、とてもうれしいと思っています。友達がいるから明るくいられるし、つらい時は、相談して、はげまされるんだと思いました。だからぼくも友達の支えになってあげたいと思います。思いやりと優しさをもって、みんなが幸せになれるように生きていこうと思います。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

知ること

開成町立開成小学校

五年 大野 朱々風

「どうしようかな、座ろうかな。」

お兄ちゃんのひくトルコ行進曲に合わせてイスとりゲームをしていたことです。曲がとまったとき、まだイスは空いていました。今、座ればチャンピオンはわたしです。でも、こうきさんはまだ、楽しそうに行進中です。わたしは少し考えて、イスに座ることをやめようと思いました。少しして曲が止まったことに気付いたこうきさんは、あわててイスに座りました。チャンピオンはこうきさんです。こうきさんはとびつきの笑顔で、うれしいときに出るキメポーズもきまり、体全体で喜びを表現してくれました。

ただ一つだけ、はつきりと言っておきたいことがあります。わたしはこうきさんに、「勝た

せてあげた。」わけではありません。こうきさんに、「勝ってもらった。」のです。なぜなら、こうきさんの喜ぶ顔を、わたしが見たいと思ったからです。こうきさんの笑顔は、そこにいるみんなも笑顔にしてくれるからです。

わたしは、土曜日や日曜日に高れい者し設や福しし設に行き、訪問えんそうのボランティア活動をしています。こうきさんの通うし設には、月に一回ある音楽クラブという時間に訪問しています。学校の友達のようにおしゃべりをするわけではないけれど、えんそうをしたり、一緒にゲームをしたり、体そうをしたり、「楽しい」ということが言葉以外で伝わってくるこの場所が、わたしは大好きです。言葉以外で伝えてくれるこうきさんたちを、わたしはとてもきれいな人だと思います。言葉はうそでも言えるけれど、こうきさんたちの伝え方にうそはないからです。

本当のことを言うと、初めてこうきさんの通うし設に訪問したとき、わたしはこわいと思いましたが。とつ然、大きな声を出したり、跳びはねたり、動き始めたり、今まで見たことのない人たちだったからです。でも何度も訪問して、こわいと思うことが一つもなくなったとき、わたしは知らなかったただけなんだと気付きました。

こうきさんは、わたしの大切な友達です。こうきさんが笑えば、みんなが笑います。こうきさんから始まる笑顔のパレードが、いつまでも続く日々を守る大人に、わたしはなりたいたいと思います。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

ひいおばあちゃんはわすれんぼう

寒川町立一之宮小学校

二年 小島 由 楽

「いくつになったの？何年生？」

「7才、2年生だよ。」

「大きくなったわねー。」

…もう4回目…。これはわたしとひいおばあちゃんの会話です。ひいおばあちゃんは、わたしが4才の時にのうのびよう気になって、右手足がうごかせなくなりました。今は車イスにのって、かいごをしてくれるしせつにいます。それからひいおばあちゃんは、びよう気のせいでわすれんぼうになってしまいました。にん知しようと言うそうです。5分前に話したことをすぐわすれてしまいます。わたしの名前もときどきわすれてしまいます。何回も何回も

同じことを聞いたり話したりします。さいしょはひいおばあちゃんのわすれるびよう気はかわいそうだし、しょうがないなと思ってしつもんにこたえていました。でも何回も聞かれると、めんどうくさいなと思う時もありました。でもおかあさんに話したら、「わすれんぼうのびよう気はなおらないけど、その時ひいおばあちゃんが由楽とわらいながら楽しい時間をすごせればいいんだよ。」と言いました。

わたしはよく夕方にしせつに行きます。するといつもえがおで、

「こんにちは。よくきてくれたわね。」

と言ってひいおばあちゃんはむかえてくれます。そしていつしよにおやつをたべます。一人でずんでいるひいおじいちゃんもよくきて、みんなでいろんな話をします。ひいおばあちゃんは、すききらいなく何でもたべらるし、とつてもおしゃべりです。

今日もまたしゆくだいがおわったら、しせつに行きます。きつとまた、

「いくつになつたの?」

「何年生?」

つてたくさん聞かれるかな…。そうしたら、何回でも

「7才、2年生だよ。」つてえがおでこたえようと思います。ひいおばあちゃん大すきだよ。

最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

その人になつたらどうか？つてかんがえることがたいせつだね。

カリタス小学校（川崎市・多摩区）

一年 秦 望 結

わたしはことしのなつやすみに、はじめてかみのけをきりました。うまれてから一かいもきったことがなかったので、おしりぐらいまでかみのけがありました。

このあいだ、としょかんの本で、びょうきでおくすりをのんでいる女のこが、かみのけがなくなつてしまったというはなしをよみました。それで、かみのけをつかって、かつらをつくっていました。そのときおかあさんが「みーちゃん、かみのけをおともだちにきふする？」といいました。

えー。わたしのかみのけ、おともだちにあげるなんていやだ！とおもいました。でも、おかあさんがいっていました。

「もしかみのけがなくなってしまうたらとか、まずしくてごはんを食べることができなかつたらと、その人になって、かんがえてみて。どんなきもちになる？」といいました。

もし、わたしがびょうきになって、かみのけがなくなってしまうたらとかんがえたら、すぐかなしくなりました。だから、おともだちにかみのけをプレゼントしてあげたら、すぐうれしいとおもいました。

わたしは、かみのけをきりにいきました。そしてきのう「ちゃんときふできましたよ。」とびょういんのおねえさんがおしえてくれました。きつと、わたしのかみのけで、かつらをつくってもらって、おともだちがよろこんでいるとおもいます。おともだちがいっぱいえがおになってくれたら、わたしもいっぱいえがおになります。

わたしが、びょうきでかみのけがなくなってしまうたらかなしいとおもったみたいに、もしじぶんがその人になったらどうだろう？ってかんがえたら、どんなことをしてもらったらうれしいのかわかるとおもいました。

目が見えない人、みみがきこえない人、あるけない人とかもいます。みんながその人たちになったらどうおもうかなとかんがえたらたすけてあげられるんだとおもいました。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

ろうじんホームでえがおがいっぱい

小田原市立新玉小学校

一年 岩田知優

なつやすみに、おかささんといもうととおばあちゃんと、ろうじんホームのなつまつりに
いきました。

あかやあおやきいろなどの、いろいろないろのちようちんがかざってあったり、しゃてき
ゲームやかきごおりのおみせがあったりして、うれしくてわたしのころのはあとがとびだ
しそうになりました。

ろうじんホームには、くるまいすにのっているおじいちゃんやおばあちゃんがいました。
わたしが、「こんにちは。おげんきですか。」というと、みんなえがおになってくれました。「き
てくれてありがとう。」といって、わたしを、ぎゆうしてくれたおばあちゃんもいました。い

もうとのとてをみて、「おいしそう。」といいながら、かぷつとゆびをくちにくわえちゃったおばあちゃんもいました。

わたしが、おかあさんといっしょにくるまいすをおしてあげると、「ありがとう。」といつてよろこんでくれました。ありがとうのこえは、いつものときよりげんきそうで、わたしもうれしくなりました。またくるまいすをおして、おじいちゃんやおばあちゃんのえがおがみたいなとおもいました。

さいごには、みんなでわになってほんおどりをおどりました。たつておどれるひとも、くるまいすのひともみんないっしょになっていっしょうけんめいおどっていたので、わたしもわのなかにはいっておどりました。

おじいちゃんやおばあちゃんのえがおがたくさんみられてうれしかつたです。

わたしにもおばあちゃんがいます。おばあちゃんは、かぞくのためにごはんをつくつたり、こうつうボランテアさんのしごとをしたりしてがんばってくれています。ひとつおしごとがおわると、「よし、もうひとつがんばろう。」と、うれしそうにおしごとをしています。そんなおばあちゃんは、わたしのじまんです。みんなのためにはたらくおばあちゃんのように、やさしいひとになりたいです。こまっているひとがいたら、わたしのころのはあとをわたしであげて、なかよしになりたいです。

ろうじんホームのみなさんにまたあいにいききたいな。

最優秀賞

ふれあい賞

マンシヨンは大家族

横須賀市立田戸小学校

五年 横田 一平

ぼくは祖父母と一緒にくらしていません。でも、「ぼくの家」には、たくさんのおじいさん、おばあさんが住んでいます。それは、なぜでしょう？

ぼくのマンシヨンのロビーにいつもすわっているおばあさんがいます。ぼくは、話すのがはずかしくて、下を向いてあいさつしか出来ませんでした。ある日、おばあさんが外に行こうとしていたので、ぼくは勇気を出して「雨が降ってきましたよー」と教えてあげました。おばあさんは「ありがとう。足が弱いから歩く練習をしに行くの。」とニッコリ笑いました。それからぼくは、うれしくなって、会うたびに話す様になりました。

野球帽をかぶった元気なおじいさん、ぼくは気になっていました。ぼくがグローブを持つ

てエレベーターに乗ると、「お！野球やるのか？」「はい！ベイスターズの大ファンなんです！」それからぼくとおじいさんは、友達になりました。

おじいさん、おばあさんは色々な事を知っていて話すと楽しいです。毎日いる人を見かけないと心配になります。みんなも、ぼくが学校を早退したり、ケガをすると「一平、どうした？」と心配してくれます。

ぼくの祖父母は、一緒に住んでいないけれど、マンションという大きな一つの家に沢山の仲良しおじいさん、おばあさんがいてぼくを大切にしてくれます。ぼくも、もつともつと大切にしたいです。

九月にマンションのお祭りがあります。ぼくも係をやる予定です。一生懸命がんばってみんなを笑顔にしたいです。この「大きな家族」が思いやり、助け合ってもつともつと仲良くなれたらうれしいです。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

地域交流について思うこと

藤沢市立六会小学校

六年 萩原 凜

私の家の近所には、おじいさんやおばあさんが住んでいる家がたくさんあります。会うと必ずあいさつをします。

そんな私がとてもおどろいたのは、以前テレビでやっていた「あいさつをしないマンション」の話です。「知らない人が話しかけてきてもしゃべってはいけない」と教えられる子どもが増えていて、マンション内の話し合いの結果、「あいさつはしない」と決めたそうです。

そんな中でも、地域の人たちが「お帰り」と言ってくれる商店街があります。この商店街では子どもたちを見守り、そして叱ってくれる大人たちがいます。この商店街の子どもたちは、社会のルールを叱られたりしながら、学ぶのです。

この他にも、地域の人たちと仲良くするメリットがあると思います。

例えば最近、子どものぎゃくたいが増えています。近所の人たちと親しければ、様子などに気付いてもらえるかもしれません。

他にも、一人暮らしのおじいさんやおばあさんに多いこ独死も、いつも毎日話しているおばあさんがいないことに子どもたちが気付けば、死んでしまう前に救急車を呼ぶことができます。

このように、地域の人たちとあいさつをすることは、とても重要なことだと思います。

私はこの前、お母さんと歩いていたとき、通りかかったおばあさんに、

『凜ちゃん、大きくなったねえ。』

と声をかけられました。私は、自分を小さいときから見ている、見守ってくれている人がいるんだなと思いました。とてもうれしかったです。

どんな人でも、自分を見守ってくれる人がいると、心の支えになると思います。

引きこもりになってしまった人も、心にきずを負った人でも、自分を気にかけてくれる人が一人でもいれば、立ち直るきっかけにもなると思います。

最近、老人ふくしや障害者ふくしが話題となっていますが、地域ふくしも大切だと思います。地域の人同士で助け合い、支え合うことが、平和の第一歩だと私は思います。

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

「バリアフリーって何だろう」

開成町立開成南小学校

六年 井上

温

最近ニュースで「バリアフリー」という言葉をよく聞きます。僕は、道路のデコボコやお店の階段などで高齢者や身体の不自由な人、ベビーカーを押しているお母さん達が困っているのを見た事があります。「どうにかならないのかな？」と思った事があり、バリアフリーについて興味を持ち今回調べてみようと思いました。

その人達にとってバリア（障へき）をなくすことを「バリアフリー」といいます。車いすやベビーカーを使っている人がスロープやエレベーターを利用し、別の階へ行ける事はよく知られています。目の不自由な人が自力で外に出て目的地にたどり着くためには、点字ブロックや音声情報があり、耳の不自由な人には手話・文字や絵の情報があります。そして一番

おどろいた事は、今までバリアとは階段や急な坂、せまい通路だけだと思ってましたが、まわりの人達の無知によって、偏見にさらされ障害がある人たちへの心ない言葉、視線、無関心など、人々の意識の中にあるものもバリアだと知りました。障害がある人は何も出来ないという考え方もそのひとつです。このような考え方こそが、障害がある人達が力を発きできないことにつながっています。

ヘレン・ケラーは『見えない、聞こえない、話せない』という三つの障害がありながらも、「ふつうの方々と同じように美しいもの、楽しい事にふれることはできる。暗闇とちんもくの中にも、無限の美しさを見いだすことができる」と自伝で語っています。

また、障害のある子をもつお母さんは、足に不自由があり、何度もあきらめずに自転車に挑戦する我が子の姿を見て「勇気のある子」と表現しました。障害のことよりも、めげずに頑張り続ける気持ちに、お母さんは人間として感動したそうです。

『障害は、不自由であっても不幸ではない』この言葉がとても印象強く心に残っています。

バリアフリーではない事や場所が世の中にはまだまだたくさんあります。困っている人を見かけたら手伝えるような人になりたいです。もしそこまでできなくても「道路や点字ブロックの上に荷物を置かない」「店員や駅員に助けを求める」ことはできると思います。障害がある人達と共に暮らしやすい社会になれるよう心がけていきたいです。

中学生の部

最優秀賞

神奈川県知事賞

おっちゃんと私

逗子市立久木中学校

二年 木戸 沙奈

「これからはおっちゃんって呼んでな。」私がおっちゃんとお会ったのは横断歩道です。歩行者信号が青になっていながらもかかわらず信号待ちをして立ち止まっているおじさんがいました。「渡るのかな、渡らないのかな。」気になってよく見てみると手には白杖がありました。青なのに車が通っていないなかったため車が止まる気配を感じることができず、渡るタイミングが分からなかったのです。この辺は街中ではないため音の出る信号ではありませんでした。私は最初声をかけようか正直、迷いました。「声をかけよう。」そう思って私はおっちゃんの肩をたたきました。「信号渡りますか。」緊張しました。でもおっちゃんは普通に、まず挨拶

をしてくれました。あ、大阪弁……。この辺では聞き慣れないので、ちよつと意外な気もしましたが、父が大阪出身の私にとつては、とてもなじみのある響きでした。私は少し肩の力が抜けました。氣づいたら、まだ青信号だったので、私は「今、信号が青なので渡りましょう。」と言いました。私は初めて目が見えない人と腕を組んで歩きました。前に習った目の不自由な人と歩く時は、ということを思い出しながら。渡り終えておっちゃんは私にお礼を言いました。その時、私はなぜか気持ちがすっきりしました。その後さらに私はおっちゃんとコンビニまで歩きました。途中、「今この前を通っています。」と報告しながら歩きました。これは小学校の時習ったので、今それを生かした！とうれしくなりました。私はおっちゃんとスピードを合わせながらゆつくり歩きました。それでもおっちゃんは「ああ、こんなに速く歩けるんや。うれしいわ。」と言ったので、私は「あ…そうか。」と思いました。

私も一度目隠しをして歩く体験をしました。目の前に実際はない電柱にぶつかりそうになるのが怖くて一歩一歩進むのが想像以上に大変だったのを思い出しました。

私はそれからおっちゃんを見かけたら声をかけるようになりました。私とおっちゃんはいつも歩く時いろいろな話をします。その中で私が心に残ったことは二つあります。

ある時おっちゃんは言いました。「でも、おっちゃんは幸せなんやで。だって普通おじさんと女の子が腕組んで歩いたりしないやろ。せやから目が見えなくなるっちゅうのは、悪いことばかりやないんよ。見方を変えるっちゅうのが大切なんやね。」私は目が見えなくなつてもそう考えるおっちゃんは、すごいと思いました。私だったら途方に暮れ、きつと外にも出ら

れなくなると思ったからです。それを聞いてからは、どんなに自分にとって嫌なことでも見方を変えて、プラスにしようと思うようになりました。

二つ目は「やって無駄なことはない。」ということ。おっちゃんが、目が見える時にしてきたこと。それは決して無駄ではなかった、とおっちゃんは振り返ってみてそう言いました。つまり無駄な努力などない、ということ。また努力は貯金できるとも言っていました。目に見えなくても着実にたまっていく。だからこれからも頑張つてな。その言葉は私の心にとっても響きました。

私はおっちゃんに出会って思ったことがあります。それは周りの大人はおっちゃんのことが見えているのにほぼ100%素通りしているということ。大人が助けている暇がないのも理解できます。関わらなくて済むことにわざわざ関わらないのが普通であり、スマートな生き方とされているのかもしれない。でもそうやってずっと見えていても見えないふりを続けていたら、本当に見えなくなってしまうのでは、と私は思うのです。大人になると、心の視力が落ちるのです。

私は声を掛けるちよつとの勇気で人一人と知り合うことができました。出会いは人生の宝だと私は思っています。私はほんの少しだけ、おっちゃんの役に立てたかもしれない。でもそれ以上におっちゃんは今まで私が考えてもみなかったことや知らなかったことを、たくさん教えてくれました。今は何事にもまず挑戦し、努力をし、いろいろな見方をもった人になりたいと思っています。そしてこれからも心の目をしっかり開いて生きていきたいです。

最優秀賞

神奈川県教育長賞

小さな勇気

平塚市立神明中学校

三年 春 木 日菜子

カツ、カツ、カツ、一定のリズムを刻み、何か地面を叩く音が背後から聞こえた。それは、新横浜駅での出来事だった。駅前には大きな歩道橋があり、私は母と駅に向かって歩いていった。

振り向くと、白杖を手にした男性が、杖を右斜め前から左斜め前へ、また右斜め前へと弧を描くように地面をつきながら歩いてくる。男性の足元には点字ブロックが続いていた。

周りの人は皆、男性に道を譲るようにスッと道を開けた。まるでファスナーを開けるように、男性を中心に静かに人の塊が左右に分かれていった。私と母も同じように黙って道を譲った。が、母は少し考えてから「ママ、あの人のお手伝いしてくるね。」と私に言うと、男性に近づ

き「ご一緒しましょうか？」と、介助を申し出た。男性は「ご親切にありがとうございます。」と言って、母の二の腕のあたりを掴んだ。初対面同士のぎこちない会話を交わしながら、三人並んで歩いた。

ほどなくして駅に着くと、男性は駅員さんのところまで連れて行って欲しいと言った。その先は、駅員さんに介助をお願いするそうだ。こういった公共の交通機関などでは、駅員さんたちが介助してくれるということを初めて知った。

別れ際に男性は「ありがとうございます。」と何度も繰り返し頭を下げ、母にお礼を言った。私は道を尋ねられた時、ためらうことなく誰にでも教えることができる。バスや電車の中で、高齢の方が立っていれば、席を譲ることだってできる。それなのに白杖を手にした方に、自分から声をかけることはできずにいた。まず、なんと声をかければいいのか分からない。仮に声をかけたところで、かえって相手の迷惑になるかもしれないし、それで断られたら恥ずかしいという気持ちがあった。だが、目の前の男性の姿を見て、それはとんでもない勘違いだったのだと気がついた。男性は心から母に感謝していた。

ふと、目が見えない状態で人ごみを歩くと、どんな感じなのだろうという疑問が湧いた。男性と同じように母の腕を掴み、目を閉じて駅の構内を歩いてみた。

人の気配は感じる。でも、それがどのくらい離れたところにいるのか見当もつかない。視覚を失った途端、聴覚が冴え、周りの音や声が普段より大きく聴こえた。音は耳の奥で反響し、緊張と不安で足がすくんだ。

視覚を失った人は、持っている聴覚などを最大限に使い、恐怖心と戦いながら街中を歩いているのだと想像した。そして、これまで声をかけようとしなかったことを深く反省した。

母は、「自分から声をかけるのって、勇気がいるよね。それって、小さな勇気なんだけどね。」と言った。今までの私には、その「小さな勇気」がなかった。しかし、今回のことで気持ちに大きな変化が生まれた。

公共の場で、私たちが何か手助けを必要とするとき、「あの人なら親切そうだから。」など、相手を探すことや選ぶことができる。だが、視覚に障がいを持つ人は、介助を必要としても、それをできる人がどこにいるのかさえ分からないだろう。そうだとしたら、視覚に障がいを持つ人が「そこにいる」ことを見つけることができる自分から、介助を申し出ることが大切なのだと考えるようになった。「小さな勇気」を持つ人になろうと心に誓った。

道を譲るために離れていくことも一つの親切だが、「一緒に」と寄り添ってくれる人がいることの方が、はるかに安心感を得ることができはるはずだ。何しろ、目を閉じて歩いた時、掴んだ母の腕は最強だった。

母の「小さな勇気」が、私に「小さな勇気」を持たせるキッカケとなったのだ。

私も、この作文を通して、また、実際に行動に移すことで、「小さな勇気」を持てずにいる人への後押しができたと思う。

私の「小さな勇気」がもう一つの「小さな勇気」を生み、それがまたどこかでもう一つの「小さな勇気」を生む。そうやって広がっていつて欲しいと思う。

最優秀賞

日本放送協会横浜放送局長賞

もやははらえば

三浦市立三崎中学校

三年 木村 愛美

私は、父が嫌いだった。

父は私が二歳の頃クモ膜下出血で倒れた。一命はとりとめたもののだんだん幻聴や幻覚などの症状が出はじめ、心配した母が父を病院へ連れて行くと脳血管性認知症であることがわかった。それからは家族で父を介護しながら生活していたが、家族全体の負担は肉体的にも精神的にも大きかった。

それなのに父はよく笑う。テレビを見る時、ご飯を食べる時、拙い喋りで自慢話をする時。私はそれが嫌だった。父のことで骨身を削っている私達よりも父が楽しそうにしていることに腹が立った。

私が小さい頃、ご飯をこぼしたら母にすごく怒られた。でも父がご飯をこぼしても母は怒らなかつた。私が、「どうしてお父さんには怒らないの」と聞くと、母はこう言った。「お父さんはいいの。仕方ないのよ。」

その時の私は、その言葉の意味をよく理解できていなかった。だから特別扱いのようにされる父を、私は羨ましく思った。

私は父のせいで家に友達を呼べなかつたし、夜に徘徊している時もあったので満足に寝られない日もあった。父さえいなければ、と思ってしまうことが何度もあった。

だから私は、父に反抗を始めた。小学校高学年あたりからケンカが多くなり、お互い手を出したこともあった。力で勝てないと知っていた私は、友達に父の悪口をおもしろおかしく話して笑った。

それからだんだん父の症状が悪化したので父が精神科の病院に入院することになった。正直、清々すると思つた。これでみんなも楽になるだろう、と思つていた。

父が入院し、トラブルは減つた。でも笑いながらテレビを見る父がいなリビングは少し寂しく見えた。父がいなくなつて、物足りなさを感じてしまうのもまた事実だった。

それからしばらくして、母と一緒に病院まで父の様子を見に行くことにした。週に一度は父の様子を見に行っている母の話では、父は家にいた時よりずっと静かでおとなしくなつていろいろいい。自己主張の強い父が静かになつていろいろなんて想像できなかったので、少し気になつた。

父は自分の病室を出てすぐのラウンジにいた。そこで久々に父の顔を見た私は、思わず驚いてしまった。

父は私が今までに見たことのない、悲しいような、苦しいような顔をしていた。そして父が口を開いたかと思うと、とても弱々しい声で「家に帰りたい」と言うのだ。いつも我が強く、しかし明るかった父と、今目の前にいる父を交互に見つめ直した私は、その場で号泣していた。父には怒らない母、そしてよく笑って楽しそうな父。そんな姿を思い出して、今私はなぜ泣いているのか少しだけ分かった気がした。そして思った。自分が一番嫌な奴だったじゃないか、と。

それからまたしばらくして、症状が安定した父が帰って来ることになった。父が帰って来てからもやっぱり口論になることはあったが、あれから大きく変わった事がある。それは、私はもう父を嫌いだと思わなくなったこと。それに父の悪口を言うこともやめたし、何より父と一緒にふざけたり笑ったりできるようになったことだ。

障害のある人も私達と同じで、悪口を言われれば傷つくし私達が笑顔でいれば安心してくれる。こんなに小さな出来事で私は変わることができたし、家族全体まで明るくなったように思える。

多くの人に、障害というもやの先、その人の本質を見ようとしてほしい。そしてもっと多くの人が少しでも笑顔に、幸せになれることを心から願っている。

最優秀賞

テレビ神奈川社長賞

笑顔をつくる介護

寒川町立旭が丘中学校

三年 加藤紫乃

「周りに迷惑がかかるから行きたくない。」五年前、親せきの結婚式の数ヶ月まえから、曾祖父に会うといつもこの言葉を言っていました。なぜなら、当時九十三歳の曾祖父は、緑内障という病気で、両目ともほとんど見えなかったからです。長年住んでいた自宅ではなんとか生活できていましたが、外出することはなくなっていました。その結婚式には、我が家も全員招待されていたので、時間をかけて説得し、車イスで出席することになりました。そしてその日が、私が初めて車イスを体験した日であり、体の不自由な人の生活を色々と感じた日でもありました。

その結婚式の日、会場で会った曾祖父は、初めての場所で様子が全く分からないせいかな、

じっとして静かでした。親せきがあいさつに行くと、声だけで判断して話していました。その様子を見ていて、目の見えない人にとって、初めての場所は、かなり不安があるということが分かりました。また、いきなり声をかけられるということにも不安を感じることに気がきました。

二つ目は、部屋を移動する時です。父が車イスを押しでしたが、案内された通路は車イスでは通れず、父はかなり遠回りをして移動していました。バリアフリーの社会になってきたとは言っても、まだまだ整備されていない所が多いということを感じました。

三つ目は、食事の時です。順番に料理が出てきましたが、曾祖父にとっては、どこに何が置かれているのか分かりません。隣の席の父が、一つずつ前に置き、一つずつ中身を説明していました。その結果、曾祖父は自分で食べることができていました。本なら食べさせてあげたほうが良いような気がしましたが、曾祖父は何でも自分でやってきた人なので、人に食べさせてもらうより、一人で食事が出来ることがとても嬉しそうでした。それを見て、介護というのは、こちらの都合ではなく、相手の立場になって考えることが大切なことだと思います。

そして帰る時、電車と一緒に乗りました。私は、その時初めて、電車に車イスが乗っているのを見ました。駅員さんが台を準備して乗せてくれて、降りる駅でも駅員さんが待っていてくれました。電車の中に車イスのまま乗れるスペースがあることも、その時初めて気付きました。

別れる時、曾祖父は、

「すまなかつたなあ。ありがとなあ。」

と、何度も何度もお礼を言っていました。出席することをあんなに嫌がっていたのに、私があの日見た中で、誰よりも一番楽しそうでした。その様子を見ていて、お世話していた父も母も嬉しそうでした。そして、その日から半年も経たないうちに、曾祖父は亡くなりました。

あの日の体験で、体の不自由な人が生活するには、色々な人の協力が必要だと実感しました。そして、安心安全に暮らすためには、もっともっと設備などの環境的な充実が必要なのは当然ですが、人の心や思いやりも同じくらいか、それ以上に大切だと感じました。少しでも快適な生活ができるように、環境と人の心の両方がより良い社会になってほしいと願います。

あの日、私は何もできずに、ただ見ているだけでした。そしてあの日以来、体の不自由な人と身近に接する機会はありません。しかし、もし機会があれば、何か自分でもできることを見つけて、行動できる人になりたいです。あの日の曾祖父の笑顔を思い出して、声をかけ、手を差しのべる勇気を持ちたいと思っています。

最優秀賞

神奈川新聞社長賞

私と弟

平塚市立中学校
二年 小林 愛海

私には小学校一年生の弟がいる。弟は自閉症スペクトラムという障害をもっている。しゃべれない、突然大声で叫び出したり、泣き出したり、気持ちの切り替えが難しいなど体は六歳に成長しているが知的年齢は一歳十ヶ月のままなのだ。

私が十二歳で弟が四歳の頃、弟は障害という診断を受けた。私はその事を母から知らされるまで弟が障害児だと考えた事も無かった。弟は周りの子とは少し言葉が出るのが遅れているのだと思っていた。私は弟が障害児であるという気持ちに変化した事は無かった。だから、周囲の人たちも私と同じように障害という事を気にせず弟に接してくれると思っていた。しかし、祖父母は私が思っていた反応では無かった。

「それはいつ治るんだ？」や「いつしゃべり始めるの？」など、そんな事ばかり言っているのだ。障害というものは病気で無い。だから、治ったりもしない。これからしゃべるのかどうかも分からない。障害は一生付き合っていかなければならないものなのだ。私は祖母の反応をみて、何故弟の障害をとて悪い病気のように扱うのかすごく疑問に思った。それと同時に私は祖母に対する哀しみの気持ちをもった。だが、世間の人たちも祖母と同じ考えだと思い知らされた。

私が弟と一緒に出掛けた時の事だ。弟はしゃべれないので自分の気持ちを上手く私たちに伝える事ができない。そのため、ストレスがたまっていき、それが爆発してしまう時がある。そうすると急に大声を出したり泣き叫んだりしてしまうのだ。弟は見た目ではつきり、障害と分かる訳ではない。そのためか、余計に周囲の人たちには、「この子は何なの？」といったような白い目で見られる事が非常に多い。また、「おい、うるせえなあ。」などとわれ、店を出て行かなければならない事があるのだ。私はこのような体験を繰り返す中で、世間の人たちの障害に対する思いなどにとても落胆した。やはり、世間の人々は祖母のような考え方の人が大半なのだと感じた。

今、世間ではインクルーシブという取り組みが進められている。インクルーシブというのは、障害をもつ人もたない人も関係なく、一人一人に合った援助、すなわち同じ場所で生活するという共存社会を目指す事をいう。だが、私はまだインクルーシブな社会とは程遠いと思う。弟は現在養護学校に通っているが、通常の小学校の支援級に入る事も検討していた。だが、

「おむつが取れていなかったり、言葉が出ていないなら養護学校の方が良い。」という事を言われたそうだ。また、弟と同じ障害をもつ子も弟と同じように養護学校を薦められたそうだ。

インクルーシブという事で、行政は障害をもつ子供も地域の学校へ通うようにと薦めている。だが、弟のような重度の障害をもつ子供は学校に受け入れてもらえない現状がある。それはとてもおかしい事であると思う。このような行政と教育現場の差の問題を早急に解決し、インクルーシブ社会の土台をつくってほしい。

障害を理解するのはとても困難な事だと思う。祖父母が弟と生活を共にする中でゆっくりではあるが障害を理解し弟の障害に正面から向き合って考えられるようになってくれたように、いつの日か障害をもたない人たちも理解できるようになると思っている。

私は障害をもつ弟と生活し接していく中で障害が日常的になった。そのように周囲の人たちも障害というものが日常になってほしいと思う。

インクルーシブの第一歩は障害を日常的にみんなが感じるようになることなのではないだろうか。

最優秀賞

ふれあい賞

その一言で

伊勢原市立伊勢原中学校

二年 長谷川 朋 世

『お手伝いしましょうか?』

「街中で立ち止まっている時、このたった一言で救われる方々があります。皆さん街で困っている人を見かけたら、ぜひ声を掛けて下さい。」

先日、私は静岡県富士宮市にある富士ハーネスという盲導犬訓練施設に行きました。私はここで、盲導犬ユーザーの方からこの話を聞いたのです。

正直なところ、今まで私は街で困っている人に声を掛ける事ができませんでした。理由の一つは、単純に私が自分から人に話し掛けるのが苦手だということ。もう一つは、他の誰かがきつと声を掛けてくれるだろう、というどこか他人任せな面が自分の中にあつたからです。

今回、私は富士ハーネスで盲導犬ユーザーの方にこんな事も教えて頂きました。

それは、目が見えない・見えにくい方が自分から誰かに助けを求めるとしても難しいという事です。

例えば、目が見えない・見えにくい方は街の「音」を目印に目的地へ向かうことがあります。そんな時困るのが、夏の時期だと蝉の鳴き声。どんなに街の音を記憶していてもあの鳴き声でかき消されてしまうそうです。また注意深く周りの音を聞いていても、静かに走るハイブリットカーの音は他の音に負けて聞こえなくなってしまうです。

このように街中で困った時、周りの誰かに行き方を伝え、誘導してもらうことが一番良いのですが、声を掛けてもなかなか振り返ってくれる人がおらず困る事が多いそうです。私も、街で声を掛けられたとしても無意識に「自分のことではない」と都合の良い考えに逃げてしまっただけという感じがして、とても申し訳ない気持ちになりました。

些細な出来事でしたが、過去に自分も周りに助けを求められなくて困った経験があります。私がまだ小学生低学年だった頃、習い事に行くため初めて一人で電車の最寄駅まで行くバスに乗ることになりました。夕方のラッシュ時だったので、沢山の人が停留所に並んでいます。バスが到着して、いつも家族と一緒に乗る時と同じように、自分の番になったらICカードを機械に当てれば反応する、はずでしたが、何度やっても反応しないうままです。後ろに並んでいる人達の冷やかな視線、積み重なる焦り。誰かにどうするのか聞きたくても、なかなか口が開きません。やっと絞り出した言葉は、細々とした「すみません…。」

の一言だけでした。

結局、すぐ後ろに並んでいた女性の方が、困って動けなくなっていた私に声を掛けて下さり、カードケースの中に挟まっていた十円玉がカードと機械の通信の妨げになっていた事に気がつきました。その時私は、自分から周りの人に助けを求める事の難しさを知りました。

周りの人に自分から助けを求める事と、困っている人に声を掛ける事。この2つは、同じくらい難しいことなのではないでしょうか。

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックに向けて「バリアフリー」が求められているとの事です。建物など、ハード面でのバリアフリー化は以前より進みつつあります。しかし、どんなに整った設備があってもそれだけでは住みやすい街として不足している部分があるのです。

『お手伝いしましょうか?』

障がいを持つ人もそうでない人も、この一言で救われる事があるのではないのでしょうか。特別な設備にも最新の技能にも勝る人間の言葉。気軽な声掛けによって障壁が取り除かれる事もあるかもしれません。このような事が、心のバリアフリーの一つだと思えます。

二〇二〇年。十七歳になっている私は、他人任せにはせず、困っている方には自分から声を掛け、沢山の人の「救い」になれるような人になりたいです。

最優秀賞

神奈川県共同募金会長賞

自分のできることから始めよう

大井町立湘光中学校

一年 平野

礼

「ちょっと行ってくるね。」

と私のばあばは、出掛けていきます。私が小さい頃、ばあばはお店をやっていたので、お店の休憩時間に出掛けていくのです。小さいながらに『ばあばはどこに行くのかな?』と思っていたのを覚えています。

あるとき、不思議に思った私は

「ばあばはどこに行ってきたの?」

と聞いてみました。すると、

「ほほえみさんに行ってきたのよ。」

とばあば。

「ほほえみさんって?」

「障がいを持つている人がいろいろ作ったり、お仕事をする所でね、ばあば達は、着なくなった洋服をリサイクルで売って、そのお金を社協に寄付しているんだよ。」と教えてくれました。

「着なくなった服を捨てれば、ゴミになるけど、リサイクルすれば、ゴミの減量化につながるでしょう?」と。

小さかった私には、その意味がよくはわからなかったけれど、なんとなくばあばは人の役に立っているのだなあと感じたのでした。

中学生になり、学校で『ボランティア募集』というお手紙をもらいました。その時は、あまり気にもとめませんでした。家に帰り、その手紙をばあばに見せると、

「礼ちゃんもボランティアやれば?」

と何げなく言われました。『えー??私にボランティアなんてできるのかなあ?ボランティアってそんな簡単にできることなの?』と思いました。

そこで、ボランティアってどういうことだろうと調べてみると、『自分から進んで、社会活動に無償で行う活動のこと』とありました。

『私に出来ることって何だろう?』まず、自分ができることを考えてみました。でもなかなか思い浮かばず、時間が過ぎていきました。そして、小さい頃のばあばが出掛けて行く姿を

思い出しました。

「ねーばあば、何でボランティアを始めたの？」
ときっかけを尋ねてみると、

「初めは、仕事をしながら、自分の負担にならないで、人のお役に立てて、喜んでもらえればと思って、始めたの。今は、レスバイトといって、障がいのある子と一緒にプールに行ったり、昼食を作ったり、みんなでいろいろやっているの！」

そんなばあばの話をきいて、ボランティアをする上で、必要なのは、笑顔とコミュニケーションだと思いました。私はばあばとちがいが、人見知りなので、人にすぐ話しかけたり話しかけられても笑顔で対応することが苦手です。でも、ばあばが私に言ってくれました。

「笑顔であいさつしてもらえると、元気がもらえるし、元気がないと、どうしたの？ って聞くでしょう。いつも私たちがしていることを、お互いに負担にならないくらいの気持ちでやればいいのよ。ボランティアって言うの大変そうだけど、例えば、道に落ちているゴミを捨てることもそのひとつなのよ。そういうことなら、礼ちゃんもできるんじゃない？」

そう言われて、もう一度考えてみると、『そうか、そういうことなら、私にもできるかもしれない』と思いました。

まず、学校に行く途中で見送りしてくれる地域の人たちに『あいさつ』をしてみようと思います。ただあいさつをするのではなく、気持ちよく感じられるように言ってみる。自分だけでなく、周りの人を元気にできるように笑顔で言ってみる。そして次に目についたゴミを

拾ってみよう。最初は恥ずかしいかもしれないけれど、チャレンジしてみようと思います。そういうことを少しずつ、続けていくと、次にまたできることが増えていくような気がします。自分からできることが増えれば、たくさんの発見や喜びも増え、充実感が味わえて、私自身も成長していけると思います。

自分のペースで、長く続けられるように、勇気と積極性を持って取り組んでいきたいと思
います。



最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会長賞

偉大なる祖母から学んだ事

伊勢原市立成瀬中学校

三年 葛貫 日菜

私は、祖母を心から尊敬しています。祖母の心は、いつも思いやりでいっぱいです。

祖母は昔から祖父を支えていて、自分の事以上に家族の事を考えてくれています。まさに陰の大黒柱であり、縁の下の力持ちだと思います。

そんな祖母を改めて偉大だと思うようになった出来事がありました。祖父の病気が発覚した時の事です。

祖父が病気になった事は私にとって、とても悲しい出来事でした。私は、祖父が亡くなるかもしれないと聞いた時、涙があふれてきました。

病気発覚からしばらくして、祖父の具合が悪くなってきました。そして、本格的な闘病生

活が始まりました。

まず、祖父は病気によって喉が塞がれてしまったため、食べ物を口から食べられなくなっていました。お腹に栄養を摂るための穴を開け、直接胃に食べ物を送れるようにする手術が行われました。

私は、病気が悪化している事を実感し、落ち込みました。しかし、祖父の胃に入れる献立を考える祖母はなにより楽しそうでした。

そんな祖母を見て、私が暗い表情をしてはいけなと思うようになりました。

祖父の病気はどんどん進行していききました。声帯を切らなくてはいけなくなり、声を失いました。ハーモニカが得意だった祖父。声を失った事によってハーモニカも吹けなくなってしまうました。祖父のハーモニカが聴けなくなった事に私は、今まで以上に落ち込みました。それでも祖母はハーモニカが出来ないならと、祖父にギターをすすめたり、この状況になっても前向きに進んでいました。

以前、お世話になっていた介護士の方々を家に招き、音楽会を開いた事がありました。祖父がギターを弾き、みんなで歌いました。介護士の方への感謝を伝える事ができ、私達家族にも病気を乗り越えようという活力が生まれました。その日の事は、ずっと忘れる事のない思い出です。

しかし、祖父は去年に亡くなってしまうました。

祖母はいつも仲良しでした。少し頑固な祖父と器の大きい祖母の掛け合いは心地よく、

愛で溢れていました。私はそんな二人の会話を聞いているのが大好きでした。祖母は祖父が病氣だと分かって、誰よりも悲しかったに違いありません。しかし、祖父は暗い事をとて嫌ったため、祖母は悲しみを表に出さずに、明るく振舞っていました。

どんな時でも、病氣で辛かった祖父を一番近くで励ましていたのは祖母です。祖母の強く、たくましい姿は偉大でした。

長い闘病生活のなかで私達はたくさんの人にお世話になりました。祖父が亡くなった後も関係は続いています。今でも祖母はお世話になった全ての方に感謝し続けています。

また、祖母はハーモニカを祖父の影響で始めました。病院や老人ホームへボランティアとして演奏をしに行っています。

同じ立場で頑張っている人を応援するためだと祖母は言っていました。祖父から受け継いだハーモニカで恩返しをしている祖母は私に、感謝する事の大切さを教えてくれます。

祖母のこのような行動には、祖父の影響がありました。昔、内向的な性格だった祖母に祖父が、人との関わり合いの大切さを教えたそうです。

そんな内向的だった祖母が、今では自治会長を務めています。地域中の方と深い関わりがあった祖父母。そのため、祖父が亡くなった時にはたくさんお世話になりました。地域の話合いなどでまとめ役となる自治会長の仕事はとて大変ですが、地域の方々には、お世話になったので、恩返しとして引き受けたそうです。

祖母からは、思いやりと助け合いの大切さを学びました。祖父を支え、思いやる心。周り

の人と助け合い、乗り越えていく心。そして、感謝を忘れず、恩返しする心。このような素晴らしい心を私も持ちたいと思います。

世界中がこのような心の持ち主で溢れて、「福祉」という言葉がぴったりと合う素晴らしい世の中になると良いなと思います。



神奈川県福祉作文コンクール入選者名簿

小学生の部

優秀賞

ポランティアのお手つだい あたたかい目を向けてほしい ハートがいつぱいの町に 少しの勇気で温かい気持ちに 大好きなあみちゃん 私の大切な家族「オーク」 みんながつながる社会 僕に出来る事 ふだんのくらしのしあわせ Aくんとのこと	逗子市立逗子小学校 横浜市立間門小学校（中区） 伊勢原市立桜台小学校 厚木市立愛甲小学校 伊勢原市立比々多小学校 大磯町立大磯小学校 平塚市立土屋小学校 聖セシリア小学校（大和市） 大井町立大井小学校 開成町立開成小学校	二年 四年 四年 五年 五年 五年 六年 六年 六年	山崎 康平 小田原 ひなの 勢山 雄溪 堀田 瑞希 宮城 暖那 田中 咲恵 小清水 伊織 瀬田 裕太 小嶋 日菜子 島田 蒼生
---	---	--	--

準優秀賞

みんながしあわせになれる町	川崎市立久地小学校（高津区）	二年	布谷光咲
きんじよのおじいちゃん	相模原市立中野小学校	二年	山崎くるみ
わたしのおじいちゃんとおばあちゃん	相模原市立星が丘小学校	三年	木村澄海
車いすをおしたけい験	横須賀市立汐入小学校	四年	鈴木美織
わたしとママとひいおじいちゃん	横浜国大教育学部附属鎌倉小学校	四年	関野あす
障害者の「害」という漢字について	藤沢市立本町小学校	五年	中本百香
私の祖母	函嶺白百合学園小学校（箱根町）	五年	山田桃嘉
電車の中で	座間市立ひばりが丘小学校	六年	山崎結芽
家族を通じて感じた福祉	寒川町立一之宮小学校	六年	中野流那
目指すべき福祉社会	寒川町立南小学校	六年	高塩玲寿

中学生の部

優秀賞

祖父母から感じた事	伊勢原市立伊勢原中学校	一年	北野敦也
勝ちたいその気持ち	伊勢原市立中沢中学校	一年	石垣遙夏
祖母の介護で感じたこと	平塚市立金旭中学校	二年	村山瑞紀
心もバリアフリーな社会へ	鎌倉市立大船中学校	二年	宇田花凜
音の無い世界	座間市立栗原中学校	二年	宮崎葵
あいさつを通して考えた地域交流	大井町立湘光中学校	二年	平石璃音
歩みよること	相模原市立鳥屋中学校	三年	小山愛琴
そのままの自分で	藤沢市立湘洋中学校	三年	村瀬柊士
助け合う世界	厚木市立荻野中学校	三年	奥津雄大
「ふ」だんの「く」らしを「し」あわせに	寒川町立旭が丘中学校	三年	阿部百葉

準優秀賞

地域の中で手を取りあって 一人ひとりの個性を認めて 障がい者は不幸の元なのか？ 高齢化社会と犬	大井町立湘光中学校 相模原市立相模丘中学校 大磯町立国府中学校 川崎市立宮崎中学校（宮前区） 小田原市立国府津中学校 小田原市立泉中学校 厚木市立相川中学校 寒川町立旭が丘中学校 大磯町立大磯中学校 開成町立文命中学校	一年 二年 二年 三年 三年 三年 三年 三年 三年 三年 三年	加藤叶夢 清水遥香 石井奈菜 内山吹華 杉崎仁美 稲葉龍星 山本佳歩 打田里奈 榎本みそら 金森胤海
--	--	--	---

神奈川県福祉作文コンクール入選作品集 平成 29 年度版

平成 29 年 12 月発行

発 行 者 社会福祉
法 人 神奈川県共同募金会
〒221-0844 横浜市神奈川区沢渡 4 - 2
電話 045(312)6339

社会福祉
法 人 神奈川県社会福祉協議会
〒221-0835 横浜市神奈川区鶴屋町 2 - 24 - 2

電話 045(312)4815

印 刷 神奈川新聞社

社会福祉法人 神奈川県共同募金会
社会福祉法人 神奈川県社会福祉協議会